

## 9月3日 年間第22主日

申 4:1～8 ヤコ 1:17～27 マコ 7:1～23

### 1. 申

v.7-8 「いつ呼び求めても、近くにおられる我々の神、主のような神を持つ大いなる国民がどこにあるだろうか。またわたしが今日あなたたちに授けるこのすべての律法のように、正しい掟と法を持つ大いなる国民がどこにいるだろうか。」

申命記は素晴らしい説教であります。南王国のヨシヤ王の時代にエルサレムの神殿から発見されるという形で公表され、これに基づいて有名なヨシヤの宗教改革が行われました。そのようにして当時のイスラエルをモーセの律法へと引き寄せ、その強力な影響下で後の時代には捕囚の地バビロンで、ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記が編集されます。ヘブライ語の旧約聖書で“律法(トーラー)”と呼ばれる第一部を構成する“創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記”という“五書”の最後の書として、申命記は非常に重要な文書なのです。

申命記における律法への情熱は、律法を通して現された神の愛へのイスラエルの感謝なのであり、まさに「初めから終わりまで信仰を通して実現される」(ロマ 1:17) ものであります。そのような信仰を通してのみ、私たちは v.2 を正しく理解することが出来ます。

v.2 「あなたたちはわたしが命じる言葉に何一つ加えることも、減らすこともしてはならない。わたしが命じるとおりにあなたたちの神、主の戒めを守りなさい。」

それはイスラエルに対する、神の愛への全き感謝と信仰の要求なのです。

### 2. マコ

このような申命記のテキストと組み合わせられて、今朝の福音書のイエスの物語りは、当時のユダヤ教の人々だけではなくて、現代の私たちへの警告の物語りとなります。

「あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている」(v.8) というイエスの言葉を、その用語法に気を取られて、現代の私たちには関係のない話だと考えてはなりません。既にマルコによる福音書が成立した当時、これらの物語りはキリスト教会の会衆が自らの信仰生活を再点検するための警告としての役割を果たしていたと思われるからです。

イエスがかつて語られたこれらの言葉が、それから半世紀ほども後になって、ただユダヤ人たちの悪口を言うためにだけ福音書の中に取り入れられたなど考えることは、愚かなことです。そうではなくて異邦人が大多数を占める初代教会が、このかつてのイエスの言葉を通して、その時代の教会に対して神が語っておられる警告を聞いたからこそ、彼らの福音書にはこの物語りが取り入れられたのでした。

3.

“神の言” “御言葉” “キリストの福音” などという用語が、まるで分かり切ったことのように私たちの周りで用いられています。しかし20世紀の教会に育った私たちは、それらの用語が意味している本当の内容を、実際には殆ど知らずに過ごして来ました。

私たちがそこで生まれ、そこで育って来た20世紀の教会は、“神の言” に代えて“人間の考え出した思想や主義主張” を重んじて来た教会でした。それがどんなに善意や愛や熱心から出たものであったとしても、「人の中から出てくるもの……」(マコ7:15) であって、キリストに起源する“神の言” ではなかったことに、私たちはそろそろ気付かなければならない時期に来ているのではないのでしょうか。

今や私たちの教会は新しい21世紀を迎えようとしています。私たちのミサを支え、私たちに罪の赦しとからだの復活と永遠のいのちを与您てくださる福音、「御言葉」(ヤコ1:21) に耳を傾けること、目を開くことこそ、新しい世紀へと進み行く私たち教会にとっての課題であることを、一緒に深く思いましょう。

アーメン、ハレルヤ。

## 9月10日 年間第23主日

イザ 35:4～7a ヤコ 2:1～5 マコ 7:31～37

### 1. ヤコ

私たちは今朝も共に集まってミサをささげています。みことばといのちのパンで養われ(各年共通用拝領祈願)て、永遠の命に生きるようになるためです。

v.5 「わたしの愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は世の貧しい人たちをあえて選んで、信仰に富ませ、御自身を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませんか。」

私たちは今朝も、私たちが神の国を受け継ぐ民とならせてくださった主イエス・キリストの救いを、大いに感謝して賛美したいと思います。

教会にはいろいろな人たちが集まって来ます。一緒にミサに参加していて、お互いに顔見知りではあっても、一度も会話したことのないような人々がたくさんいます。日本語ではなくて他国の言葉を使っている外国人の男女も、私たちのミサに参加しています。そのような種々雑多な、いわば寄り集まりのキリスト者たちが一緒に賛美を歌い、一緒に十字架のしるしをし、一緒にキリストの御聖体に与かっています。私たちはみな共に、神の国の約束を信じているのです。

### 2. マコ

今朝の福音書の朗読箇所は、主イエス・キリストの御業への驚きと賛美の言葉で終わっています。

v.37 「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

この物語り伝承の背景には、今朝の第一朗読で聞いた イザ 35 章 があります。言うまでもないことですが、この物語りは教会が行ったある医療事業の優秀な成績について報告しているわけではありません。そうではなくて、イザヤ書で語られている終末的な神の救いの到来の“しるし”が、ほんとうに現れたことへの驚きと賛美が報告されているのです。

「時は満ち、神の国は近づいた」(マコ 1:15) ことと切り離しては、主イエスの御業のどの一つも語り得ない!…… というマルコの宣教(ケリュグマ)を、私たちは今朝聞かされているのです。

私たちは主日のミサにおける聖書朗読配分というものが、主イエス・キリストの再び来られる日まで、三年周期で繰り返して用いられ続けていくということの意味に注目したいと思います。主日B年の年間第23主日には、私たちの教会ではこれまでもこの マコ 7:31～37 が朗読されて来たのだし、これからも繰り返し朗読されて行くのです。そのような私たちの教会のミサの中で、終末的な神の救いの到来の“しるし”への驚きと賛美は、今年も一人一人の心の中に新鮮に湧き起こります。

3.

「信仰の神秘。主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで。」(記念唱)

みことばといのちのパンで養われ(各年共通用拝領祈願)て、ご一緒に神の国への旅路を歩いて行きま  
しょう。                      アーメン、ハレルヤ。

## 9月17日 年間第24主日

イザ 50:5～9a ヤコ 2:14～18 マコ 8:27～35

### 1. マコ

vv.34-35 「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」

私たちは、このイエスの言葉を軽々しく“分ったような気分になって”聞くべきではないと思います。20世紀のキリスト教は、これを“美しい徳”として、“偉大な人生の目標”として理解する傾向が強かったと言えるのではないのでしょうか。しかしこの福音書のテキストにおいて、「自分を捨て、自分の十字架を背負って……」とは、主御自身の十字架の死と結びつけて語られているものなのです。

当時の黙示文学に於てメシアを指す“人の子”という称号に、イザヤ書の苦難の僕を結びつけて御自分に当てはめられたのは、主イエス御自身による解釈であったと考えられています。第二イザの中に四つある“僕の歌”は、敗北と神に捨てられることをこの僕の姿として描いています。私たちの救い主イエス・キリストは、敗北し神に捨てられた……そのようなメシアであったことを、今朝の福音書は私たちに語っているのです。

### 2. イザ

このテキストは“僕の歌”の第三番の部分です。紀元前8世紀の預言者イザヤの弟子の系列に属する後代の人々が、紀元前6世紀のバビロンで預言活動を行っていました。エルサレムが滅亡してイスラエルが捕囚の民となってから、既に50年程が経っていました。神に背き、神に捨てられたイスラエルは、神の怒りによって打たれ、恥辱の中に置かれていました。その現実をそのままに受け入れて、そのような敗北を越えてなお神の助けにひたすら信頼することを、“僕の歌”は歌っているのです。

この民族としての敗北の事実をあるがままに認め受け入れることによって、その敗北を越えてなお神の助けに期待することを、“僕の歌”は捕囚のイスラエルに訴えたのでした。

### 3. マコ

マルコ福音書のこのテキストは、メシアである主イエスの十字架の死をイザヤ書の“苦難の僕”の姿に照らして理解することの重要性を、私たちに語っています。そしてそのような“敗北と神に捨てられたこと”としての“十字架”に、私たちキリスト者も結びつけられているのだと教えているのです。

vv.34-35 は、福音の終末的な性格を色濃く感じさせる言葉です。マルコ福音書が書かれた当時には、人々はこのテキストに殉教者たちのことを先ず思い浮かべたことでしょう。

2000年9月(主日B年)

いずれにしてもキリスト者の信仰の生涯の結末に関わるようなものとして、このテキストは今も私たちに語りかけています。「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。」(ロマ 6:8)

私たちの救いは神から、神の子イエス・キリストから来るのです。

アーメン、ハレルヤ。

## 9月24日 年間第25主日

知 2:12,17~20 ヤコ 3:16~4:3 マコ 9:30~37

### 1. マコ

v.32 「弟子たちはこの言葉が分らなかったが、怖くて尋ねられなかった。」

私たちキリスト者は、主イエス・キリストの死と復活によって実現した救いに与かっています。私たちは主日のミサに集まって来て、主の十字架のいけにえを記念し、その救いを賛美しています。

私たちは以前は主の受難と死の意味が分らなかったけれども、今はそこで実現した永遠の命に至る救いを信じています。

イエスの弟子たちは、初めは怖くて理解できなかったことを、やがて主の復活の後に、“救いの福音”として理解出来るようになり、その“救いの福音”の証人となりました。

このように、私たちは、主イエス・キリストの十字架と復活の福音は信仰の外の世界では、本来「分らない……」「怖い……」ことなのだということを考えてみましょう。なぜなら私たちは日常の生活では、そのような信仰の外の世界の中で現に歩んでいるからです。

### 2.

弟子たちは「途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていた」(v.34)と述べられています。

恐らくマルコ福音書は、“そのように議論し合うことが当然である世界”から、使徒たちは主の復活の後に、“十字架と復活の福音を理解する世界”へと恵みによって移されたという事実を証言しているのだと思います。

私たちがここで気付かなければならないことは、私たちが日常の生活を営んでいる“信仰の外の世界”では、だれも落伍者や敗北者になっては生きて行けないということです。人生の落伍者になることは“怖いこと”であり、敗北者になることは“恐ろしいこと”なのです。そうならないために……、少しでも他人よりも上の順位へ昇るために……、人は生まれたときから老年に至るまで生涯焦り続けて、常に現状に満足することがないのです。

しかし、主イエス・キリストの十字架の死は正にそのような敗北者の死でありました。しかし、神が御子イエスを死者の中から復活させてくださいました。私たちが主イエス・キリストを信じて受け入れるということは、私たちがそのような敗北者の死に結びつけられることを承認するというに他なりません。

### 3.

主イエス・キリストは私たちを罪と死から救うために、御自身をいけにえとして献げて奉仕してくださいまし(フィリ2:6-8)。このキリストの祭司としての奉仕による救いの業を、私たちは主日のミサで記念します。

それだけではなくて、私たちも教会の頭であるキリストの祭司の務めに与かってその奉仕の業に参加し、共にミサをささげるすべての人に仕えます。

「わたしたちはいま、主イエスの死と復活の記念を行い、  
ここであなたに奉仕できることを感謝し、  
いのちのパンと救いの杯をささげます。」(第二奉献文)

ですから今朝の福音書の中のイエスの言葉、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」(v.35) は、ミサをささげる民である教会のことを言っているのです。

イエス・キリストの救いは、切り離された個人ではなくて、ミサをささげる民である教会のために与えられたものです。v.35 を単なる“謙遜という道德の勧め”と考えるはなりません。ミサの中で“拝領前の信仰告白”をすべての会衆と共に唱えるとき、私たちはこの v.35 のイエスの言葉を心に思い浮かべましょう。

「神の小羊の食卓に招かれた者は幸い。」  
「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、  
あなたをおいてだれのところに行きましょう。」

アーメン、ハレルヤ。